

21世紀のファラオ主義

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(信州イスラーム世界勉強会代表)

〔燕と鰐と河馬の話のつづき〕

大学時代の友人二人がエジプトにやってきたのは、この「カイロ通信」の前の号（第4号）を書き終えた11月の末のことである。彼らの案内を兼ね、休暇を取って妻と一緒に上エジプトの古代遺跡めぐりをした。筆者にとってアスワンやルクソールを訪れるのは、1982年以来、実に43年ぶりのことだった。そのときも、今回来た友人の一人のFさんと一緒だった。当時、彼は建設機械の販売の仕事でアラブ首長国連邦に滞在していて、エジプトに遊びに来た。奥さんと小さかった娘さんとの家族旅行に付きあったのである。Fさん家族と一緒に撮った古い写真を今回の旅行の後で見る機会があった。まさに隔世の感というのはこのことを言う。もちろん自分たちは若者の姿であるし、加えて風景が一変していた。古写真では、ルクソールの「王家の谷」に向かう道に立つ一對の（仁王像のような？）「メムノンの巨像」の周囲に畑が広がるだけで何もなかった。しかし今や、近くまで住宅街が迫っている。その中には洒落たホテルもあるという。

アスワンやルクソールは、埃が立つ細い道路にハントール（幌）馬車がひしめいていた記憶があるが、そんなのどかな光景はどこにも見当たらない。すっかり近代的な都市に変わっていた。それと同時に、少しすさんだ雰囲気も感じられる。国有エジプト鉄道（国鉄）の南の終点に当たるアスワン駅は昔ながらの古い駅舎のままだが、その駅前でお茶を飲んでいると、次々に子どもの物乞いがやってくる。内戦の続くスーダンからの難民かと思われられた。それだけではなく、他のアフリカの国からスーダン難民を装って来た人たちも混じっているような気もした。観光客を狙うスリの集団もいるようである。



前号でスーダンへの船旅のことを書いたが、今やエジプトとの間の道路の整備が進み、陸路での移動が主流になったようだ。同じく久しぶりにアスワン・ハイダムを訪れると、今や観光地の目玉として道路がきれいに整備されていた。

かつて乗船したスーダン行きフェリーボートの船着き場は、ダムからもっと南の方に移動したという。前号ではナイル川の水位が上昇したときに、鰐（ワニ）がハイダムを通過した、といいかげんな話を紹介した。それは不正確

〔アスワン・ハイダムから下流を望む、友人たちとともに。発電施設が右に見える〕

で、水力発電用の取水口に設置された網の隙間を潜り抜けてくるのではないかと想像した。

アスワンではオプション・ツアーで、ヌビア村を訪れた。故郷が湖底に沈んで、移住をよぎなくされたヌビア人の人たちの村だが、今や洒落た観光施設となっている。そこにある店の一つでは鱔が飼われていた。しかし、皮をはいで産業にしているわけではない。思わず見入ったのは、その観光村に行く途中の船から見る光景であった。ハイダム以前のナイル川の河畔を目の当たりにするような気がしたからだ。アスワンから地中海にいたる長い川の流れは、今や自然氾濫も起きない、管理された人工的な水路となってしまうている。



〔写真：ヌビア村に向かう途中の光景〕

アスワンからルクソールまでの間は、ナイル川に並行した道路を北に向かい、コモンボ（コム・オンボ）、エドフ、エスナーの神殿を拝観した。余裕のある観光ツアーなら、クルーズ船で一つずつゆっくり訪ねるところを駆け足で回った。最初のコモンボでは、神の化身として祀られた鱔のミイラの博物館（2012年開設）を見学した。二番目のエドフでは、河馬（カバ）狩りの連続壁画を見つけた。何回も銛で突かれ、最後はひっくり返されて止めを刺されたかわいそうな河馬。



〔河馬狩りの連続壁画（一部）：エドフ神殿〕

このエドフでは、神殿を飛び回っている燕たちの姿を目撃した。彼らはどこから来たのだろうか。この「カイロ通信」の第3号で書いた、7月の末に姿を見かけなくなったカイロの燕たちは、北に向かったと思っていた。彼らは一度、地中海を越え、子育てをしてから今度は一気にエジプト南部まで渡ってきたのだろうか。それとも別の経路をたどった燕たちなのか。これから彼らはどこに向かって飛び立っていくのだろうか。燕たちは飛行ルートの違ういくつかの集団に分かれているのかとも考えた。

〔大エジプト博物館と日本の援助〕

大エジプト博物館（略称 GEM）が正式オープンしたのは、上エジプトへの旅行の少し前、

11月1日のことであった。旅行に出発する直前に友人たちと訪れた。何といてもまずはツタンカーメンの特設コーナーに直行するのがお勧めである。個人旅行の場合、ツアーグループに先駆けて朝一番に行くのが賢いらしい。

GEMには正式オープンの前、部分公開の時期の2月に一度訪れたことがある。そのときにはツタンカーメン・コーナーはまだ、街中のエジプト博物館にあった。その際のGEM訪問では、JICA（国際協力機構）職員の方の案内で館長にお会いすることができた。GEMは、総工費約630億円のうちその半分以上350億円近くに及ぶ日本政府の円借款供与で完成にいたった。JICAは技術協力も行ない、日本の博物館から遺物の修復技術の専門家が派遣された。2月にお会いした館長はエコノミスト出身であった。将来的に博物館の採算がとれるように、手腕を期待されての選任と思われた。

日本によるGEM建設支援に関して、2011年革命後、某省の副大臣を務めたこともある弁護士の本さん（高名なジャーナリストのご子息であった）は、そんなにお金を出しているのだから、日本人はタダにすべきだと言っていた。ちなみにチケットの説明書きをよく見ると、無料で入館できるのは、以下の人たちである。どんな日も無料なのが6歳以下の幼児、身体障がい者。祝祭日以外の平日が無料なのが、ツアーガイド、退役軍人、殉難者（シャヒード）の家族、観光考古省職員、同省認可の報道関係者、公立大学の歴史・考古学・美術などの教員・学生（ということは私立大学の教員・学生は対象外）などとなっている。



[GEM 内部の風景]

日本の博物館ではあまり見られない免除リストである。おそらく欧米基準に倣ったものであろう。加えて軍関係への配慮も感じられる。

年間500万人から700万人の来館者を予想しているという。2キロほど離れたギーザの大ピラミッドまで続く遊歩道も準備されているようだ。博物館関連の複合施設を周囲に設置すればさらなる収入も見込めるであろう。

GEMは、考古学博物館としては世界最大級の博物館である。まさにその通りで、毎日1万5000人から1万9000人ほどの来館者数だという。しかし、入館の時間帯を設定していることもあり、またあまりに広いのでそれほど数の人が入っている気がしない。

さて、先ほど紹介した「日本人の入館料はタダに」というありがたい助言ではあるが、そんなことにはならないだろう。それはこれまで日本が対外援助の広報において基本的にモデストな（慎み深い）態度を取ってきたからである。開会式直前のエジプトの新聞報道を見ると、たしかに英字紙にこそ日本大使のインタビューが掲載されたが、主要アラビア語各紙の記事には日本の「“に”の字」（al-yābān の「yā’の字」というべきか）も見つからなかった。1988年に竣工なった新オペラハウスも、日本がODAで無償贈与したことは、普

通の（クラシック音楽と縁がない）エジプト人の間では「知る人ぞ知る」という状況である。

東日本大震災後の援助に当たって、あたかもマーキング行為をするような誇示をした某国を思い出せば（短期間の支援をした証拠を残すために大げさな金属製モニュメントが南三陸の町役場近くに建っている）、日本はそんなことを良しとしない、奥ゆかしいお国柄なのであろう。しかし、そのように「分かる人に分かればいい」という鷹揚（おうよう）な態度はいつまで続けられるであろうか。最近の日本の政治潮流の変化を見ると、対外援助への税金の支出には今後、厳しい目が注がれるようになるのではないか。先に述べた名を出すのもためらう某国とは、ピンクウォッシング（占領地の人権侵害を隠蔽するためにLGBTQ+フレンドリーな姿勢を表面上アピールする行為）で知られるエジプトの隣国である。日本はそうした破廉恥（はれんち）な真似をする国にはなあってほしくないと思うが、さて。

〔古代エジプト式のオープニングセレモニー〕

11月1日に開催された、GEMのオープニングセレモニーは、豪華絢爛（けんらん）であった。ユーチューブの映像（<https://www.youtube.com/watch?v=15hf3VFzYVc>）を見ると、大統領夫妻が三角形（ピラミッド型）のデザインの演台を前にして、招待された各国要人を出迎える姿がある。すると次々に乗りつける黒塗りのリッチな自動車から、大統領や首相、王族、首長が降りてくる。そして演台に上って大統領夫妻と握手で挨拶し、一緒に記念撮影をする。このシーンが延々と放映される。

演台に続く道には、古代風の衣装を身に包み、ファラオ的なメーキャップをした美男美女が立ち並び、それぞれがピラミッド型の電気燭台を乗せた杖を持ったり、金色のアンク（古代エジプトの「十字架」）を胸に抱いたりしている。そしてこの儀式を盛り上げるのは、オーケストラによる西洋音楽の演奏であり、個々の演奏家の姿がアップで映される。あたかもオペラ「アイダ」（初演 1869年：旧オペラハウス）を観ているような、オリエンタリズム的演出が満載である。



〔GEM オープニングセレモニー ①オーケストラ ②大統領夫妻との挨拶 ③ラメセス2世像の前の記念写真〕

晴れやかな表情で大統領が諸国の要人を迎える姿は、現代のトトメス3世かラメセス2世か。かつて古代エジプトの王（ファラオ）がアッシリアやバビロニア、ヒッタイトやミタンニ、リディアといったオリエントの国々の使節団を迎える姿の再現を見るようである。

この大統領礼賛ともいえる映像はその後、エジプト下院選挙を報道するテレビ番組の中

で繰り返し流された。5年おきに開かれる下院選挙は、現大統領統治下では今回で3回目になる。投票は地域別に2回に分かれ、一回目はGEMオープニングセレモニーから10日後、二回目はその二週間後、さらに決選投票が12月に二回行なわれた。半年前の同じ2025年夏には上院の選挙もあった。人目を奪う派手な路上の広告を見た記憶があるが、選挙はいつの間にか終わっていた（選出議員200名のうち175名が親大統領派、加えて100名が大統領による任命議員）。

この下院の選挙もその結果は同じだった。与党の「祖国の未来党」一大統領の側近の軍諜報機関関係者が党首を務める一を中心とした15ほどの政党が集まった「エジプトの未来リスト」が全596議席中の8割近い463議席を占めた。無所属の当選議員109名を除いて計算すると、政党から立候補し当選した議員487名の実に95パーセントに上る。サダト大統領が導入した複数政党制は、コスメティック・デモクラシー（見せかけ民主主義）と揶揄（やゆ）された。その後のムバーラク政権下で数々の議会選挙がなされたが、ここまで「翼賛的結果」が見られたことはない。この親大統領派リストに加わることなく議席を得た政党は、サラフ主義者のヌール党（6名当選）など3政党のみであった。

この下院選挙の時期、カイロの天気は秋から冬に向かい、風が強い日もあった。以前に書いた、洗濯バサミも要らないどころの状態ではなく、強風でベランダの物干しスタンドが倒れることもあった。しかし、「無風の国」で行なわれる選挙は無風選挙なのである。

〔古代エジプト・ブームの再来〕

GEMの話に戻るなら、エジプト社会では最近、一種の古代文明ブームが起きているらしい。考古学調査とともに観光業にも従事し、エジプト滞在の長いHさんに教えてもらった。とくに若者の間で顕著であり、それはアクセサリーの変化に表れている。アラビア文字などのイスラミックなデザインに変わって、ファラオ的な意匠が流行っている、という。

このブームは、政府の施策によって生みだされた結果でもある。今回のGEMの公式オープンもまさにその一つである。側面にラメセス2世が描かれた90トンのオベリスクが、タハリール広場に据えられた頃から、その政策は顕著になったのかもしれない。5年前の2020年のことである。翌21年には「ミイラのゴールデン・パレード」が華々しく執り行なわれた。歴代のファラオとその王妃の22体のミイラを、街中のエジプト博物館から新しく建設されたエジプト文明博物館に移送するパレードである。同年4月3日の同博物館オープンを記念する行事であった。

タハリール広場へのオベリスク設置もミイラのパレードも、いずれもコロナ渦の真っ最中に実施された。GEMを含めて、これらの施策は観光産業の振興によりエジプト経済の浮揚を狙ったものである。と同時に、政治的な意図も感じられる。タハリール広場は、オベリスクのコーナーを中心にして、ナツメヤシが植えられたり、大きな植木鉢が置かれたりして公園風の空間に変えられた。この空間は、いくつかの区画に分割され、立ち入りしにくい作りになっている。2011年のエジプト民衆革命の再来、デモや集会を阻止するための

施策であろう。

思い出すのは、かつてナセル大統領がバルコニーから演説をしたアブディーン宮殿（近代的新市街とイスラーム旧市街の間に位置する）の変化である。筆者が最初に長期滞在していた 1980 年代初頭、すでに宮殿の広場には樹木が植えられ、鉄柵で囲まれた公園のようになっていた。おそらくこれは、当時のサダト大統領による改変ではなかったかと思う。しかし、彼が 1981 年 10 月に屋外の閲兵会場でイスラーム主義武装集団の凶弾に倒れた後、次のムバーラク大統領は、毎年のもーデー（労働の日）を含め、すべての集会を屋内で行なうようになった。ナセルは、大衆運動を操作して強権体制を作ったが、彼の後継者たちはいずれも、統御できない大衆運動に怯えるようになった。

〔一世紀前のファラオ主義〕

さて、エジプトにおける古代文明ブームは、今回が初めてではない。百年前の 1920 年代以来のことである。それは 1922 年に始まる。この年の 2 月、エジプトは形式的だが独立を果たした。第一次世界大戦後に独立を求め、1919 年革命と呼ばれる大規模な民族運動が起きた（本通信「第 0 号」で言及）。老獺（ろうかい）なイギリスは運動を弾圧すると同時に、妥協策としてエジプトに一方的に独立を付与することで植民地支配を実質的に継続させた。

しかし、こうした従属の枠内でも、憲法を制定し（1923 年憲法）、立憲王制の下で近代的な国民国家への道を歩もうとする人たちもいた。そのとき利用されたのが、同じ 1922 年の 11 月のツタンカーメンの王墓発見である。その歴史的な考古学的発見のニュースは世界をかけめぐり、エジプト人自身にも大きな影響を与えずにはおかなかった。「自分たちは古代エジプト文明を引き継ぐ者、ファラオの末裔である」という民族主義の意識が強まったのである。この古代文明に民族のルーツを求めるナショナリズムを、エジプトの場合「ファラオ主義」と呼ぶ（同様にレバノンでは「フェニキア主義」がある）。

〔GEM のツタンカーメン黄金のマスク〕 →

ファラオ主義の一つの特徴は、古代エジプトという共通のルーツを示すことによって、ムスリムとコプト派キリスト教徒の間の国民融和を図ろうとした点にある。それは、ユダヤ教徒も参加した 1919 年革命の思想的遺産であった。この古代文明の利用によって宗教を越えた民族の団結を目指そうした点において、キリスト教徒は重要な役割を果たしたのであるが、彼らの間では「自分たちこそ正統なファラオの末裔である」という意識も生まれた。古代象形文字を一部受け継ぐコプト文字によるコプト語を復活させようという動きすらあった。もちろん、歴史的に見るならば、一神教のキリスト教は、多神教の古代宗教の伝統を否定していった事実はあるのだが。

ファラオ主義の主張は、当時の世俗主義的でリベラルな知識人によっても唱えられた。その代表が盲目の大文学者ターハ・フサインである。ソルボンヌ大学で学位を取り、西洋



志向の強いこの天才的知識人は、ファラオ主義と同時に地中海主義も唱えた（拙著『エジプト自画像』平凡社を参照）。彼によれば「エジプトは近代西洋と同じく地中海文明に属するだけでなく、その文明の故郷だ」というのである。彼は『エジプトの文化の将来』（1938年）の中で、それゆえ「エジプト人がヨーロッパ人の中に溶け込んでいくことを恐れるものではない」とさえ述べた。

1920年代当時の雰囲気伝える同時代資料として、社会学者サイイド・オウエイスの自伝『私の背負った歴史』（1985年）の一節をここで引用してみたい。第2号でも述べたが、長い間、中断していた同書の翻訳は、エジプトに来て作業を再開したが、そうそう時間が取れるものでもない。著者のご息子のマスアド・オウエイス先生（ヘルワン大学元体育学部学長、名誉教授）から「君は分かっているのか、私は何歳になったと」とお叱りを受けている。

御父君の1913年生まれの子サイイド・オウエイス博士が、ギーザのピラミッドやスフィンクスを見学したのは、1926年のことだった。旧制小学生の高学年だったサイイド少年は、ピラミッドを初めて見て感激して、こう綴っている（同書第3章）。

「その日は、とても素晴らしい一日となり、その思い出は深く胸に刻み込まれている。それは時代がいかに変化しようとも消え去ることのない思い出である。ああ、それは何と素晴らしく、壮大な遺跡であったろう。当時、私は13歳だったが、それまでこうした遺跡がエジプトの大地の上に堂々と息づいていることを知らなかったのだ」。

遺跡の見学を引率した校長先生は、ファラオ主義の信奉者であったようである。

「校長先生は、第一王朝の創設者、「ミーナー」〔メネス王〕の時代から第30王朝〔紀元前4世紀〕までのファラオ時代の歴史について、各王朝の年数や、王様の名前、彼らが行なった主な事績を年表にして美しい画用紙に書き入れ、それを教材に使って教えてくれた。この年表を一瞥するだけで、エジプトの長い歴史の全体像を把握することができた。さらに私たち生徒は誰でも、安い値段でこの年表を買うこともできた」。

〔ファラオ主義の盛衰〕

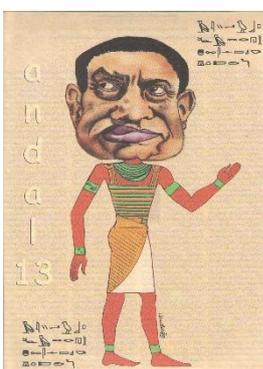
しかし、ターハ・フサインが『エジプトの文化の将来』を書いた1930年代後半というのは、ファラオ主義を否定する、新しい政治思想潮流が抬頭した時期でもあった。イスラーム主義とアラブ民族主義である。1928年にムスリム同胞団を設立したハサン・アルバンナーは、イスラーム主義の立場から、ファラオ主義をイスラーム以前のジャーヒリーヤ（無知／無明（むみょう））時代を美化するものだと厳しく批判した。

もう一方のアラブ民族主義は、それまでのエジプトにはほとんど縁がなかった。しかし、1936～39年のパレスチナ・アラブ大反乱とその鎮圧といったパレスチナ問題の深刻化を通じて、人々の間にアラブへの連帯意識が高まった。さらにこの時期、サウジアラビアの建国（1932年）やイラクの独立（同年）など、イギリスの地域支配の枠組みの中ではあるが、アラブ各国で近代国家建設への動きが加速した。そして、アラブ各国の国民統合のために、

アラブ・イスラームの文明的遺産（アッバース朝やウマイヤ朝）を掘りどころにする民族意識、アラブ民族主義が強調されるようになった。

イスラーム主義とアラブ民族主義という、一国の枠を超えた統合を求める急進的なイデオロギーは、当時の近代教育を受けた新知識層に受け入れられた。また同時期の地域横断的な刊行物など出版メディアの発達によって勢いを増した。このような歴史的条件下で、独立と変革を求め、激しい運動が展開する大衆政治（「アラブの街路」の政治）がアラブ各地で展開した。そしてその熾烈な権力闘争を勝ち抜いたチャンピオンが、エジプトのナセル大統領であった。1952年エジプト革命後に実権を握ったナセルは、現代のサラディン（サラーハッディーン）として大衆の歓呼（かんこ）を受けた。とりわけ「新しい十字軍」による土地の略奪と抑圧の下にあったパレスチナ人民衆は、彼に解放の夢を託した。一方、アラブ民族主義の旗手として、中東地域に覇を唱えたナセルは、他のアラブの国からは圧政者のファラオと見られたかもしれない。

アラブ民族主義の優勢の中で、ファラオ主義そのものはしだいに忘れられた思想となった。さらにアラブの解放の夢が1967年中東戦争の敗戦で敗れると、代わって勢いを増したイスラーム主義の影響下、ますます影が薄くなった。ナセルを継いだサダトによってファラオ主義は微妙な位置に置かれるようになった。ナセルの呪縛から逃れるため、イスラーム主義に接近したサダトは、「ムスリムの感情に配慮して」エジプト博物館のミイラ室の閉鎖を命じたこともあった。しかし、その彼が「背教者（カーフィル）の統治者」と断罪され、「ファラオのような振る舞いをした」と非難されて、暗殺の憂き目にあったのは皮肉である。



さらに、時代の舞台はめぐり、2011年革命でムバーラク政権が瓦解したとき、民主化を求める声の中、「専制のピラミッドはついに崩壊した」というように、専制政治の象徴としてファラオを否定的に評価するイメージがしばしば見られた（拙著『エジプト革命』平凡社新書を参照）。

➡ [ファラオ風に描かれたムバーラク大統領]

そして今再びの古代文明ブームである。もちろんエジプト人が専制政治を古代以来の伝統だとして諦めて受け入れているから、ファラオ主義が再生したわけではない。旧約聖書の『出エジプト記』の記述などを利用して、エジプトを東洋的専制の母国として描いてきたのは、近代欧米人の方である。

現在、流行しているように見える21世紀のファラオ主義とは、思想的には底の浅い、軽薄な文化ブームにすぎないものではないかと思う。GEMの公式開会式におけるファラオの権威のイメージも同様である。

1919年革命の挫折の後に生まれたのが、ファラオ主義であった。当時、ターハ・フサインが語ったエジプトの明るい未来の世界が、十分に実現されたという実感は、多くのエジプト人にはないであろう。その後、エジプトの完全な独立は、ナセルによって達成された。

しかし彼のアラブ民族革命の夢は、はかなく潰えた。夢破れた後の国を立て直すため、次のサダトは今で言う「エジプト・ファースト」の路線を取った。ムバーラクもこれを受けつぎ、政権の「安全運転」により、目覚ましい変化もない安定した体制を維持してきた。ただし、地域政治の中でのエジプトの地位は急降下していった。

そのような中で起きたのが 2011 年民衆革命であった。当時、運動に参加した人たちの多くが「こんなに自分たちがエジプトを好きだったとは思わなかった」と語ったというエピソードは今も強く記憶に残っている。しかし、二年後に政変（2013 年 6 月革命／軍事クーデター）が起き、革命の熱は急速冷却された。2011 年革命が挫折したとするか、その成果を引き継いだ新体制の下で、栄光と繁栄の道を再び歩み始めたと考えるかは、エジプト人それぞれの政治的立場によって異なるだろう。しかし、かつての 1919 年革命後のファラオ主義のように、過去の歴史的遺産（トゥラス）にもとづき、未来を拓くような新しい思想が生まれてくるだろうか。

この問いに答えるために、今一度、読み直したいと思うのが、拙著『エジプトの自画像』で紹介した地理学者の思想家、ガマール・ヒムダーン（1928-93）である。主著『エジプトの個性』（初版 1967 年、改訂版 1980～84 年）では、1919 年革命後の代表的思想家ターハ・フサインを批判し、その克服を試み、ファラオ主義とアラブ民族主義の調和を図った。また、近代欧米の東洋的専制論を批判しながら、自らはナセルの専制が生みだした大学社会の腐敗に悩み、抗議のためにその職を辞した。そして自立的研究者の理想というべき孤高の研究生生活の道を歩み、悲劇的な死を遂げた。

ヒムダーンの著作は、1952 年革命の思想的遺産といえるであろう。2011 年革命は当初、専制の打倒と民主主義の実現という、生前の彼の願いを達成するかに見えた。しかし、その願いは再び裏切られたというべきであろう。そして後の状況を観る限り、彼の思想的遺産は顧みることなく、忘れ去られているかのようである。とはいえ、悲観的になることなく、社会や思想の新しい動きをもう少し勉強していきたいと思う。

〔現代世界のファラオ〕

以上がこの一世紀のエジプトにおけるファラオ主義の盛衰である。エジプトの話ばかりしていても気がふさぐので、ここで話を少し飛躍させ、現在の世界に目を転じてみよう。するとそこには、金（きん／かね）色の光を放ち、君臨する現代のファラオの姿が見える。彼は古代エジプトの王よりも短気らしく、気に食わない国には奇襲攻撃をかけたたり、空母を差し向けたりする。

ある民族が他の民族が住んでいる土地に入ってきて、住民を抑圧したり、虐殺したり、追い出したり、勝手に居座ったりする行為を（入植型）植民地主義という。第二次世界大戦後の現代世界は、こうした植民地主義を否定する約束をすることで再出発し、成り立ってきたはずだった。だが、現代のファラオは、そんな決まり事を初めから認めていない。だから時代遅れの入植型植民地主義の道をてらうことなく邁進する国のガザでの残虐行為

を支援する。それどころかそのファラオ自身も、安全保障上の理由から、他国の領土を、その住民の意思を無視して併合（買収）するという。

それでは今の世界は 19 世紀の帝国主義の時代に戻ってしまったのか、というと、それどころではなく、もっと古い時代に回帰しているかのような錯覚すら覚える。関税のディールだと称して、個別に貢納（巨額投資の約束など）を押しつける。その一方的な押し付けの関係は、古代王朝の朝貢体制にも似ているような気もする。

しかし、その古代的外観は、もちろん幻影である。この 21 世紀のファラオは、現在のところ人間が統御に失敗している欲望資本主義（軍事産業をその柱の一つにした）のパペット、節度を知らない操り人形なのである。この現代のファラオ的専制が作り出す矛盾や抑圧の最底辺にいる犠牲者としてパレスチナ人がいる。

= * = * = * = * = * = *

前号（第 4 号）の続きであるが、最後にパレスチナ人のアドナーンさんを再訪したことに触れておきたい。12 月の終わりに新進気鋭のイスラエル／パレスチナ研究者の Y さんが日本から調査にやって来たので紹介したのである。アドナーンさんは Y さんを一目見るなり、君はバスケットをやってきたんだねと、コーチの眼で見破った。アドナーンさんは、長い活動歴、したがって数多い投獄経験を持つ。5 か所のイスラエルの拘置所の間を転々と回った。もっとも長かった交流は、アルアクサー・インティファードの時期であったという。そんな時期でも、拘置所の中にいた方が外で暮らしているよりはるかに快適であった、と彼はいう。獄中で食事当番を務めた経験から料理の腕を磨き、釈放されて後に小さな食堂をクラブの近くに開いた。もちろん、今回のイスラエルの攻撃ですべて破壊された。

アドナーンさんは、Y さんに言った。「出発前にぜひもう一回、来なさい。そのときには料理を作って待っているから」。ということで数日後にまた彼が住んでいる家を訪れ、マクルーバ（アップサイドダウン：羊肉の焼きこみピラフ）を堪能した。この料理は、パレスチナをはじめ、大シリア地域（シリア・ヨルダンなど）で有名なご馳走である。



[アドナーンさんの手料理“マクルーバ”の盛り付け光景]

アドナーンさんの味付けは少々ピリ辛だった。現在の生活状態から羊肉は簡単に手に入るものではない。弟の画家のイーサさんが買って残しておいてくれたものであるという。

アドナーンさんは、いろいろ話されたが、今回、もっとも印象に残ったのは、次の言葉である。

「今は、インティファーダもないし、平和もないし、国家もない状態だ」。

私たちは何をすべきだろう。何ができるだろう。